

# NEWS LETTER

VOL.15  
DEC 2020



HRC-GH

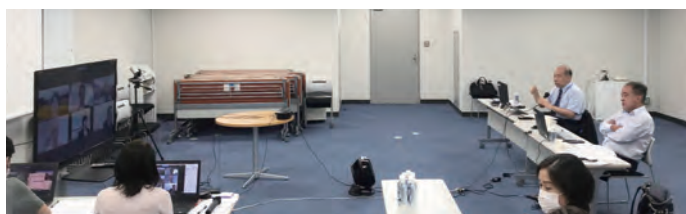
## 国連／国際機関へ行こう - 日本人専門家の方へのグローバルヘルス・キャリア・ディベロップメント・ワークショップ



12月6日(日)、今年で5回目となる「国連／国際機関へ行こう - 日本人専門家の方へのグローバルヘルス・キャリア・ディベロップメント・ワークショップ」がオンラインで開催され約160名の参加がありました。今年もWHO西太平洋事務局長のジェフリー・コプザ管理・財務部長、ボリン・チャン肝炎担当官、ローラ・ダビソン渉外担当官をリソース・パーソンに迎え、WHOと採用プロセスについてご説明頂いた後、履歴書の書き方、筆記試験の受け方、面談の受け方等の個別事項につきご教示頂きました。また、新たな試みとして、国際的なポジション探しのためのLinkedInの

活用術について、岡本健 UNDP 人事スペシャリストと斉藤文栄 JOICFP グローバル・アドボカシー・マネージャーに個人的な体験を交えてお話し頂きました。今年は恒例の模擬面談がオンライン上でのやりとりとなり、初めての試みでしたが、結果的に約160名の方々に模擬面談をご視聴頂き、途中で面談希望者の飛び入り参加もあり、盛況のうちにワークショップを終えることができました。今後もオンライン方式による有効な参加のやり方等に工夫を凝らしながら実施し、国際ポスト志願者の皆様のサポートをしていきたいと思っております。

## 国際機関規範設定メカニズムワークショップ ～専門家として国際貢献する道～



10月2日(金)に「国際機関規範設定メカニズムワークショップ～専門家として国際貢献する道～」を開催しました。このワークショップは、WHOやグローバルファンドなどの国際的な機関におけるルール作りに携わることに関心をもつ邦人の後押しをする目的で企画されました。新型コロナウイルス感染症の流行のため、ジュネーブ、日本を結んでのオンライン・ワークショップという形態で開催しましたが、132人もの方の参加がありました。職種も医療従事者のみではなく、企業、大学、研究所等から幅広い層にご参加いただきました。当日は中谷センター長からワークショップの目的とその背景の説明をしたのち、WHOより山本尚子事務局長補佐、ジョン・グローブ規範品質管理部長、サビネ・コップ薬剤規範チーム・リーダー、グローバルファンドから小松隆一技術評価委員会担当シニア・アドバイザーが登壇し、求める人材、実際のリクルートメント・プロセスについて説明がありました。さらには、実際に国際機関の委員会に参加している専門家の永井真理氏と佐藤大作氏より、仕事内容、応募、採用までのプロセスについて自身の経験を共有していただきました。本ワークショップがさらなる専門家の国際機関での活躍の後押しになることを期待しています。

## 国際保健外交ワークショップ

我が国のグローバルヘルス人材の活躍の場は、海外フィールドや国際機関事務局さらには専門家として規範設定に携わるだけではありません。政府代表等として国際機関等のガバナンスに参加することも大切であり、国際利益と国益とを調和をもって主張できる人材の養成が急務です。その為、厚生労働省研究班(班長:磯博康教授)によりこのワークショップが2020年12月12日と13日の両日バーチャル方式で開催され、当センターとしても全面的な協力を行いました。参加者は、国際機関の意思決定会合(governing body meeting)に参加した、あるいは参加予定の官民の中堅・若手実務者などで、厚労省、外務省、JICA、NCGM、大学、シンクタンク、NGO、産業界等から30名を超える参加がありました。そこに、将来を担う医学部、公衆衛生大学院の学生などがオブザーバー参加し、日本・タイ・ブラジル・WHOの専門家からの講義の他、会議場での実践的発言演習などを2日間にわたり熱心に行いました。

## ■ 人材登録のお願い

12月現在、594名の方が人材登録・検索システムに登録されており、ご希望に応じた空席情報がマッチング・メールにて届くようになっております。人材登録・検索システムの使い方に関する動画も登録ページに掲載しています。未登録の方は登録されますようお願いいたします。  
<https://hrc-gh-system.ncgm.go.jp/>



## グローバルヘルス・ロールモデル・シリーズの掲載

国際保健分野でのキャリアを考える際ネックになることが、ロールモデルになるような人物が身近にいなかったのでキャリアパスを具体的にイメージできないということをよく聞きます。そこで当センターでは世界の様々な地域で、また、グローバルヘルスの多彩な方面で活躍する日本人の方々がご帰国された際に熟練したインタビュアーにお願いして、キャリア形成のプロセスをお尋ねし、センターのホームページ上に公開させていただくこととしました。

第5回は、国連人口基金（UNFPA）ボリビア事務所代表の木下倫子氏と、イントラヘルスインターナショナル チーフテクニカルオフィサー・バイスプレジデントの穂積大陸氏です。

インタビュアー 清水真理子

### 第5回



#### 国連人口基金（UNFPA）ボリビア事務所 代表/助産師 木下 倫子 [きののした りんこ]

1975年長野県生まれ。千葉大学看護学部卒業後、東京葛飾赤十字産院に入職、助産師として5年間勤務。2003年米国ノースカロライナ大学にて公衆衛生学修士号取得（国際母子保健学専攻）。2003年ノースカロライナ大学疫学部から研究者としてコンゴ民主共和国キンシャサに派遣。2006年 UNICEF コンゴ民主共和国キンシャサ及びゴマ（プランニング、モニタリングと評価担当）。2009年 UNICEF ニューヨーク本部（ナリッジマネージメント担当）。2012年 UNICEF ニカラグア事務所（副代表）。2014年英国ロンドン熱帯衛生大学にて修士号取得（疫学）。2016年 UNICEF プルキナファソ事務所（副代表）。2020年 UNICEF 西、中央アフリカ領域事務所パートナーシップ上級アドバイザー（代理）。2020年8月より現職。南アフリカのウェスタンケープ大学公衆衛生博士課程に在学中。

大学で看護学を専攻し看護師と助産師の免許を取得、東京葛飾赤十字産院に入職しました。ここは第三次医療機関だったので緊急帝王切開もたくさんありましたが、同僚の助産師や産婦人科医とともに自然分娩を全面的に推進、院内で勉強会を開催して学びを深め、都内で自然分娩では最も人気の高い産院になりました。また、私はその頃から現場での研究が大好きで、育児電話

相談室を通して初産の方が抱える問題をまとめるなど、充実した5年間でした。海外に出ようと思ったきっかけは、大学の卒業旅行で訪れたタイのバンコクです。発展の象徴ともいえる高層ビルのすぐそばにスラム街があり、衛生事情の悪い貧困に苦しんでいる人がいることを目の当たりにしました。母子死亡率が依然として高い途上国で母子保健改善に貢献したいと思い留学準備にとりかかりました。

アメリカには大学時代3カ月の短期留学で行っただけでしたが、英語は好きで産院勤務時代も英会話学校に通っていました。TOFLE や GRE の準備をしながら、私立は学費が高いので州立大学にしぼり、大学のWEBサイトから情報を収集、何人かの先生に「私は日本の助産師で国際母子保健について学びたいのでアドバイザーになっていただけませんか」とメールを送りました。するとノースカロライナ大学（チャペルヒル）のTrude先生からすぐに返事が来て、「先日、東京で日本人の助産師に会って印象的だった。ぜひうちの学校にいらっしゃい」。幸い出身の長野県のロータリー財団の親善大使奨学生に採用され、留学が決まりました。（続きは [https://hrc-gh.ncgm.go.jp/role\\_model/](https://hrc-gh.ncgm.go.jp/role_model/) でお読みいただけます。）



#### イントラヘルスインターナショナル チーフテクニカルオフィサー・ バイスプレジデント 穂積 大陸 [ほづみ だいらく]

1964年青森県生まれ。1989年順天堂大学医学部卒業（MD）。1991年カリフォルニア大学バークレー校公衆衛生修士（MPH）。2007年マサチューセッツ工科大学経営修士（MSM）。22年にわたり、パキスタン、ザンビア、マラウイ、ケニア、ガーナなど20カ国以上で保健医療政策プロジェクトに携わる。ハーバード大学公衆衛生大学院武見プログラムフェロー、インストラクター、東京大学医学部の非常勤講師を歴任。貧困国向けの保健医療技術に携わるNPO、PATH（シアトル）で9年間シニアアドバイザー、2016年より開発途上国における保健システム強化を目的としたNPO、Management Science for Healthの保健医療技術担当ディレクターとして活躍。現在、IntraHealth Internationalのチーフテクニカルオフィサー兼バイスプレジデントとして同組織のCenter for Technical Excellenceの運営を担当、リーダーシップの活性化と30カ国以上のフィールドプロジェクトの技術の質の向上に日々努めている。

私は1989年に医学部を卒業、まさにバブル時代に大学生活を送っていました。今だと国際保健、当時熱帯医学と言っていました。その分野に興味を持つ人が増えてきて、私も夏休みにシンガポール大学の交換留学、タイの皮膚科病院の見学、難民

キャンプにも行きました。バングラデシュでの新しい下痢症対策など、公衆衛生プログラムのことを雑誌で読んだとき、私には日本で臨床医になって患者さん一人ひとり診るより国際保健分野での計画立案やマネジメントの方が効率がいいと閃いてしまったのです。国際保健の道を進むなら、まず英語が必要ということで、横須賀米海軍病院でインターンをし、WHOの募集要項を見ると公衆衛生修士号が必要と知り、UC Berkeleyに留学することにしました。

大学卒業時、英語は全くできませんでした。横須賀でインターンを始めて半年たったころから段々慣れてきてBerkeleyでは鍛えられました。推理小説を一冊辞書なしで完読できた時のことは鮮明に覚えています。マイクル・コナリーのハリー・ポッシュ・シリーズは今でも好きですが、推理小説は次々読み進めたいので教科書より楽しいでしょう。マネジメントを担当するようになると、英語力は「物事を状況に合わせて最低限の言葉で正確に表現すること」が必要になります。単純に語彙を増やすということではなく、社会文化背景や社会通念などの把握が大切だと思います。（続きは [https://hrc-gh.ncgm.go.jp/role\\_model/](https://hrc-gh.ncgm.go.jp/role_model/) でお読みいただけます。）